

椎名麟三『美しい女』論

——〈神の同労者〉の視点を持つキリスト教文学——

尾 西 康 充*

1

椎名麟三の小説『美しい女』（「中央公論」，1955年）は，19歳のときに関西の私鉄に交通労働者として勤めはじめて以来，47歳の現在に至るまでのできごとを主人公の「私」が回想する。それは日本労働組合全国協議会（全協）が大衆活動方針に転換し失業者運動や反戦闘争を展開していた1931年前後から，盧溝橋事件が発生し国民精神総動員運動がはじめられた1937年を経て，太平洋戦争開戦の1941年12月頃までの時代に重なる。

過去をふりかえって考えてみると，私は，いろんな人々から，いろんな風に云われながら生涯を送って来た。ある時期は，左翼的な人々から，無自覚な労働者だとか，奴隷根性をしているとか，臆病だとか，卑怯だとか，いわれた。またある時期は，右翼的な人々から，無関心

* 三重大学人文学部教授

だとか曖昧だとか無責任だとかいわれた。現在では、組合の意識的な保守的だといわれている。このようなレッテルについて一言も弁解しない。むしろ、我ながら情けない企てだと思うのだが、人々から与えられたこれらのレッテルへ、人なみの熱い血を通わせ、生命の光をあたえてやりたいと思うのである。

「私」は左翼労働組合が全盛であった時期には、運動への参加に消極的であったために、組合員から「無自覚な労働者」や「奴隷根性」をしているなどと誹謗された。その後、侵略戦争が拡大し左翼組織が弾圧されて翼賛運動が本格化した時期には、戦争協力に消極的であったために、以前とは逆に右翼の在郷軍人会員から「無関心」や「無責任」などと中傷された。「私」は自分に貼られたこのような「レッテル」に対して「弁解」せずに、むしろそれらに「人なみの熱い血を通わせ、生命の光をあたえてやりたい」と思うという。イエスの十字架上の復活の場面に感銘を受けて自己の信仰をたしかなものにしたクリスチャン作家椎名は「キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きる」(「ローマの信徒への手紙」第6章4節、新共同訳)ことに信仰の本質があると考えていた。作品のなかで「私」はクリスチャンとして設定されていないが、作品執筆時における椎名の信仰が「私」の思考に投影されている。

最左翼の労働組合であった全協は、当時非合法であった日本共産党の指導下に1932年に最盛期を迎えた。日本共産党は労働組合や農民組合などの組合員に広く党籍を持たせるという大衆活動方針に転じ、それまで合法舞台で闘争していた活動家に、検挙の危険をおかしても入党させることになった。戦前から戦後にかけて警察当局の弾圧に屈せずに失業者運動や反戦闘争を展開していた日本共産党および全協の基幹構成員は在日韓国・朝鮮人であった。全協は「在日本約五十万の朝鮮人労働者を始め、中国、台湾人労働者は政治的抑圧を極端な経済的搾取の下にあり、日本帝国主義によ

つて、労働者階級の分裂のためのオモチャ」とされていることを問題視し、「民族的偏見に対する闘争」と「植民地解放のための闘争」を主たる運動方針として掲げていた¹。在日韓国・朝鮮人の有志たちは、当時植民地化されて抑圧支配されていた民族の解放を訴えて、それらの組織に参加したのであった。椎名自身も全協組合員になって入党し、1932年8月26日の京阪神日本共産党員一斉検挙事件では特高警察によって検挙起訴されている。

だが作品のなかで「私」の同僚倉林が家庭の事情を理由にして入党を拒むと、党オルグの「若い男」は「親が死のうが、子供が病気になろうが、そんなこと何ですか！ すべてのを打ちすてても労働者の解放のために尽くすのがほんとうの労働者じゃありませんか！」と叱責する。そして自分は「この運動に死を賭けているんですよ！」と彼に入党を強請するのである。この後、家庭の事情と党オルグからの執拗な勧誘の間にはさまれて苦しんだ倉林は発狂してしまうのだが、会社の幹部だけではなく党員たちも彼の発狂を嘲笑したと描写される。そして彼らの冷ややかな態度を見た「私」は「卑屈や臆病や奴隷根性などの、滑稽な着物を着せられてはいるが、その下でひそかに生きている私たちの身体を示したい」と願うのである。椎名が〈精神〉ではなく〈身体〉の意義を主張するとき、それは全協組合員時代、留置場で特高警察による拷問を受けたときの記憶が背景にある。椎名文学の〈原光景〉ともいえる拷問の場面は、自伝的な内容を扱った主要作品に共通して描かれ、主人公は繰り返しフラッシュバックする拷問の記憶に苦悩する。

だが私にとっては、あの拷問のときの一瞬が忘れられないだけだっ

1 「プロフィンテルン第五回大会決議『日本に於ける革命的労働組合運動の任務』に対する正当なる解釈とその大衆化のために闘へ(1931)」(『現代史資料』第15巻、1965年、みすず書房、430頁)

たのだ。あの死の恐怖におそわれたとき、自分の信ずる正義や自分の愛する仲間や労働者としての誇なんかふいにどうでもよくなって、死ぬより白状した方がいいと思った一瞬をだ。もちろん私は、外観の上では白状していないという勇ましげなことになっているが、それは意識を失うという偶然が私をすくったにすぎないのであって、内面では立派に自分や仲間に対する裏切りを行ったということは事実なのだ。

私は、これを自分の弱さと感じた。しかし戦争は、極端な形でそれが人間の悲劇であることを実証したのである。ひとは、個人的な自分を守るためには、たとえ抵抗という形であっても全体的な、あのときは国民としての自分を裏切らなければならなかったし、全体的な自分であろうとしたときは、個人的な自分というものを捨てなければならなかったのである。どんな反国家的なひとでも、戦争に負けて自分の国が滅亡するということは、そのぎりぎりのところでは承認することはできなかつたにちがいないからだ。

（「愛と自由と幸福と」、『若い女性別冊』1964年2月）

椎名にとって、拷問による死の恐怖のために自分の信条や仲間を裏切ろうとしたことは、神に対する裏切りと等しい原罪として胸裡に刻み込まれることになった。神なき精神的風土を持つ日本社会において、椎名は死の恐怖におびえ続けながら、自分の信条や仲間に対する裏切りを自己の原罪として背負うことになった。死の恐怖が原罪と固く結びついて意識されたことは、椎名における独特のキリスト教信仰に発展したのである。

他方、実際は全協組合員で宇治川電鉄キャップであった椎名は「自由の彼方で」（『新潮』1953年5月、9月、54年2月）のなかで、主人公清作の姿を通して、組織にしばられている自己の虚しさと、運動が成果をあげない苛立ちを表現している。

二日後の全協の会合で、清作は、はじめから腹を立てていた。彼はこんな小さな電鉄の、こんな小さな全協の支部にしばられている自分にいらいらしていたのである。まるで杭をうち込むのに、肝心の杭の頭をはずして地面ばかりたたいている気がしていたのだ。だがそれが清作の真実の姿だった。

清作の姿を通して表現されている「肝心の杭の頭をはずして地面ばかりたたいている気がしていた」という感情は、椎名文学において〈絶望〉と〈ニヒリズム〉のテーマとして追求されることになる。

2

日中戦争が泥沼化すると、戦時体制が強化され労働組合は左右の路線を問わずすべての団体が活動を制限される。それらに代わって在郷軍人会の市町村・会社単位で分会が設置された。在郷軍人会は予備役・後備役軍人が中心になって戦意高揚に努め、召集事務や徴兵検査、簡閲点呼などに協力した。電鉄内に結成された分会に積極的に参加していた妻の克枝は「私」に対して「非国民！」と叫ぶ。そして「新聞見はれ。新聞見たら、あんたの眼さめるわ」と愚弄して戦争協力をうながした。だが「私」は、たとえ自分が「無気力」と罵られようとも「一個の権力からそれを決めつけられる『無気力』であるならば、それがどんな権力からであろうともその『無気力』を心から誇りたい」と決心する。なぜならそこに「永遠に揺るぎのない強固な反抗」が存していると考えたからであった。

しかし社会の動静に無関心を装う「私」にも時代の暗い影が落ち、ある日召集令状が届く。「私」は煙草一本分を煎じて半分を飲み、残りの半分は営庭に並ばされる直前に便所に隠れて飲んだ。するとニコチンの反応によって肺結核に酷似した症状を呈するようになり、「即日帰郷」の処分を

受ける。アジア近隣諸国に対する侵略戦争が拡大し、日本人の多くが面従腹背の生活を余儀なくされた時代、徴兵の忌避は社会の強権に抵抗するための消極的手段の一つであった。いうまでもなくそれはクリスチャンの良心的兵役拒否の思想に繋がる行為であり、権名自身も同じような手段を使って兵役を逃れた。だがその結果、彼らは右傾化した大衆から「非国民」や「無責任」などという罵声を浴びせられて疎外され、社会から暴力的に排除されることになる。

このような形でしか生きることのできない「私」に赦しを与えるのが「美しい女」であった。彼女は「私」の幻想でしかないのだが、いつも「私」に笑いかけ、「私」のすべてを受け入れてくれる。作品のクライマックスで、「私」は同僚の妻武藤ひろ子に惹かれ、彼女こそ「美しい女」ではないかと思うようになる。ひろ子は「相変わらず女学生風に髪をおかっぱに切ったままで、太り気味の身体付き」をし、そのうえ「丸い顔の艶もましていたし、笑うと白い歯が美」しい。だが過去に自殺未遂をしたことがあり、普通の会話の最中にも不意に「暗い顔付になって、自分の左手の人差指を見ながら、右手の親指でゴシゴシこすっている」。強迫神経症を思わせる異常なしぐさは、彼女が組合活動をしていた頃、特高警察によって性的虐待を受けていたことが原因であることが分かる。

「うち、裏切もんやし。うち、バスにつとめてるとき、ストライキで警察へつれて行かれたやろ。竹刀でうちのあそこへつつ込みはったんや。それで……」そして彼女は気ちがいめいた声を出して叫んだ。「もう、いや！ そんなこと！」

性的暴力をともなう苛酷な拷問が心的外傷となって彼女に精神の異常をもたらしたのである。彼女はテロや監禁、虐待、強姦などの暴力による被害によって生じる「心的外傷後ストレス障害」(PTSD: post-traumatic stress

disorder) を発症させた。時代の暴力が彼女の人生を大きく歪めたのだが、社会から疎外され続けてきた「私」もまたその犠牲者で、心的外傷のために自己同一性を失う解離性障害 (dissociative disorders) を発症させていた。「なるほど私は、一度だって本当の自分であったことはない」という離人症に苦しめられる「私」はひろ子を助けることはできないし、彼女も「私」を助けることはできない。

椎名文学の〈原光景〉ともいえる拷問の場面は、「運河」(『新潮』1955年10月～56年3月)にも登場し、椎名が実際に体験した拷問を想起させる内容である。

洗吉に警察署の二階にあった広い道場が思いうかんでいた。その真中に、細長い白木の坐り机を鍵型において、若い検事と書記が坐っていた。洗吉は、その前に坐らされ、年とった動作ののろい特高が、彼の後に立っていた。彼へ連絡に来た地方委員や彼の細胞員の名をいえというのである。特高は、洗吉が知らないというと、洗吉の後手にしばった腕と背の間へ竹刀を通して肩に掛け、ヨイショ、ヨイショと掛声をかけながら、竹刀をこじ上げるのだった。両腕が、もげるようだった。彼は、こじ上げられるたびに、情なくも悲鳴をあげながら脂汗を流した。だが彼はそれに耐えた。しかし特高は、いつまでもその拷問をつづけた。彼は、苦痛に耐えかねて、身体を畳へ倒した。だが、特高は、その彼を起こそうともせず、そのままなおも竹刀で洗吉の腕をこじあげつづけた。

特高警察による激しい拷問のために気絶しそうになった洗吉は、自分の前に「蠅の一匹」が飛んでいるのを目撃する。

そのとき洗吉は、転がっている自分の鼻先の向うに、蠅の一匹とん

でいるのを見たのである。蠅は、その洗吉の苦痛にはなほだ無関心に、赤ちゃけた畳の上を這い歩いてはとび上っていた。すると洗吉の自分を支えていた検事や特高への怒りがぐらりと崩れた。洗吉は、このまま自分は死んでしまうのではないかという恐怖を感じたのである。すると急に何も彼も馬鹿馬鹿しく、何も彼もどうでもいいものであった気がしはじめた。その彼には、正義として信じていた思想も、そして上部からの連絡だった地方委員の白い知的な顔も、いまとなつては意味を失って、彼の死に値いしないものになっていた。そして彼は、みじめにも、死ぬよりは白状した方がいいと思いはじめたのである。そのとき彼の鼻先の向うの蠅はとび上って、検事のあぐらに組んだ足の見えている机の裏側へとまり、それからその端へ歩いて来て、その縁をつたいはじめた。特高は、ふたたびヨイショといいながら竹刀をもち上げた。洗吉は、自分の叫び声を遠く聞いた。そして彼は、他愛もなく意識を失ってしまっていたのである。

人間の世界に無関心に這い歩き、自由に飛び回る蠅をみた洗吉は、自分が蠅を見ているのと同時に、蠅の目から自分を見ている。すると蠅と人間と、どちらが人間らしく生きているのか分からなくなって、それまで「自分を支えていた検事や特高への怒り」が崩れて「死の恐怖」を感じる。椎名にとって、これは人間の実存を問うきっかけとなった瞬間である。

3

「私」はこのようにして戦争を乗り越え20年以上勤続することができたが、ついに昇進できずに運輸課の切符の係員のままで、しかも乗ることだけが生き甲斐であった電車に乗務することさえできない。それは戦争中に電車を脱線させて壊してしまったからで、「あの気ちがいめいた意味、人

を轢いてもいいが車はこわすなという意味を与えられて、それが極端に達し、私にそれが許せなかった」という。人間を轢殺してもよいが車両は壊してはならないという言葉には、〈ヒト〉よりも〈モノ〉が重要であるという転倒した考え方が見られ、戦時下の日本社会には、いかに未熟人間観しか存在しなかったかということをも明らかにする。

また椎名は戦後再建された労働組合の運動にも懐疑的な態度を示している。戦後初のゼネストに向けて一段と昂揚していた労働組合のデモ行進を、つぎのように描いていた。

そのときブラックカードを押し立てた四、五十人のデモ行進が雨のなかを歩いて来た。鹹首絶対反対と墨で紙に書いたその字は、雨に濡れて黒い涙を流していた。それらの種々雑多な服装をした労働者たちは、自由と肉体を持って余していた。彼等はいらだたしそうにメーデー歌を叫びはじめたかと思うと後がつづかず、また黙り込んで、雨に打たれながら疲れ切った身体をのろのろ運んでいるのだった。その彼等はまるで何かの恐怖に打ちひしがれているようだった。

(「深夜の酒宴」、『展望』1947年2月)

雨のなかを歩く「四、五十人のデモ行進」の「鹹首絶対反対」と墨で書かれたプラカードが「雨に濡れて黒い涙を流していた」。「自由と肉体を持って余していた」労働者たちは苛立ちと沈黙を繰り返し、まるで「何かの恐怖」に打ちひしがれているように見えたという。「自由と肉体」を持ってあますようになった彼らは、ファシズム権力によって支配されていた戦時下と同じように、本当の意味において「自由と肉体」を自己のものにすることができない逆説におかれている。プラカードの「黒い涙」に象徴されるように、〈絶望〉と〈ニヒリズム〉の恐怖におびえ続けるのであった。「美しい女」では、それらを総括して「きちがいめいたもの」や「悪魔めいた

もの」と呼び、「個人的なもの」であれ「社会的なもの」であれ「異常なもの」は一切受け入れないと主張する。

私は、いまでも、この世の一切のきちがいめいたもの、悪魔めいたものへ対立する平凡さへ、それとたたかい得る光と熱をあたえてやりたいと願っている。個人的なものであれ、社会的なものであれ、異常なものは、もうごめんだ。そして私は、そのことを訴えようと思ってこの手記を書いたのだ。

生きて戦後を迎えることができた「私」は今もなお「きちがいめいたもの」や「悪魔めいたもの」を拒絶し、それらに対立する「平凡さ」に「光と熱」を与えてやりたいという。この「平凡さ」というのは、〈庶民の処世術〉の延長線上にあるというような単純なものではなく、人間を超越した存在を前にしながら心の平安を保って生きるクリスチャンの姿勢を指す。「あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだ」（「ローマの信徒への手紙」第6章11節）とパウロが語ったように、人間は信仰によってイエスとともに復活する。そして「かつては罪の奴隷でしたが、今は伝えられた教えの規範を受け入れ、それに心から従うようになり、罪から解放され、義に仕えるように」（「同」第6章17～18節）なのであり、「美しい女」という小説は、クリスチャン作家椎名の信仰が端的に表現された作品で、ひとりの平凡な交通労働者が持った〈神の同労者〉の視点から戦時下の日本社会を批判した反戦小説である。

註：椎名麟三「美しい女」の本文は『椎名麟三全集』（冬樹社）から引用した。拙稿の補足として拙書『椎名麟三と〈解離〉——戦後文学における実存主義』（朝文社）をご高覧下さい。